

字体の新造と変形の最前線

激動の香港に見る



吉川雅之 よしかわ まさゆき / 東京大学、AA研共同研究員

漢字という文字が持つ特徴の一つとして、
字体の新造や変形が意外と柔軟であることを挙げてよいのではないか。
新造や変形は字が書き記される現場で起きるのであり、書き手の意識と無関係ではない。
フィールドワークを通してその動態に迫りたい。

文字表記を問うフィールドワーク

「野外調査」という語からイメージされるところのフィールドワークに筆者が従事したのは、1990年代と2010年前後、そしてここ数年間に過ぎない。調査対象は東アジア大陸部の農村で話されている地域言語である。だが、それとは別のタイプの調査活動を1998年以来毎年欠かさず行ってきた。調査地は世界有数の大都市香港である。調査対象は音声言語ではなく、書記言語(文字言語)である。

筆者が香港に在住していた1990年代中後期は、本来音声言語として存在していた^{えつる}粵語(広東語)が書かれる、すなわち文字で記されるという現象が伸張した時期であり、街頭広告はその勢いが顕著な媒体の一つであった。それ以来、粵語で書かれた街頭広告を撮影するための渡航を20年以上続けてきたのだが、2019年は別のものを探すことにした。逃亡犯条例改正案に端を發した一連の動乱の最中に現れた、市民による手書きの政治的メッセージである。そこには音声言語の書記言語化という香港ならではの興味深い現象が顕現しているに違

いない。その確信の下、幾つかの地区を回ってレノウォールや落書きの類いを撮影した(写真1、2)。現場で見たのは、これまで粵語の書記言語化を支えてきた粵語特有の字体とは異質な字体の進化であった。

漢語方言字と広東字

漢語(いわゆる中国語)に属する地理的変種が書き記される機会は多くはない。だが民間では書き記すに当たって、中国の官製字典に収録されていない新造字等を用いることがある。中国では「漢語方言字」と総称され、中国東南部以外の方言や権威的でない方言にも見られることがある。だが、字数の多さと知名度で群を抜いているのは粵語であり、粵語に特有な字体は「広東字」とも呼ばれてきた。広東字は、中華人民共和国で共通語「普通話」の普及が進むに伴い、広東では使われる機会が減っていったが、英領であった香港では粵語の書記言語化の伸張に伴い、着実に市民の認知を得ていった。ところが、新造字である広東字以外にも、社会で慣用されている俗字や異体字など、香港に特有な字体は少なくなかつ

た。そこで、1999年に香港政府はそれら特有な字体をコンピューター・ネットワーク上で表示するための『香港増補符号集』を制定した。登録された4,702の文字・符号には「鱧魚涌」、「深水埗」、「赤鱗角」といった香港の地名に不可欠な字も含まれている。ここにおいて、香港に特有な字体のコンピューター・ネットワークに於ける規格化が進み、登録された字はIT用語で「香港字」と総称され、都市空間に溢れるようになった。IT用語としての香港字と文字学・文字論用語としての広東字とは同義ではないが、広東字が現代では広東ではなく専ら香港で用いられている事実も相俟って、両者を混同する者は多い。

インターネット時代のパラドックス

規範化を経た広東字「野」、「咄」、「嘅」、「攞」、「冇」などは街頭広告には欠かせない。だが、文字が手書きされる現場では、それと異なる字体に巡り会うことがある。「野」が「野」、「冇」が「無」で手書きされる如く。そこには広東字が公教育の教育内容に含まれていないことによる脆さが露呈している。



写真1 路肩のコンクリート製防護柵に記された政治的メッセージ「中国は強国だと? 尖閣諸島を取り返してから言ってもらおうか!」(香港島湾仔)。「野」が広東字である。

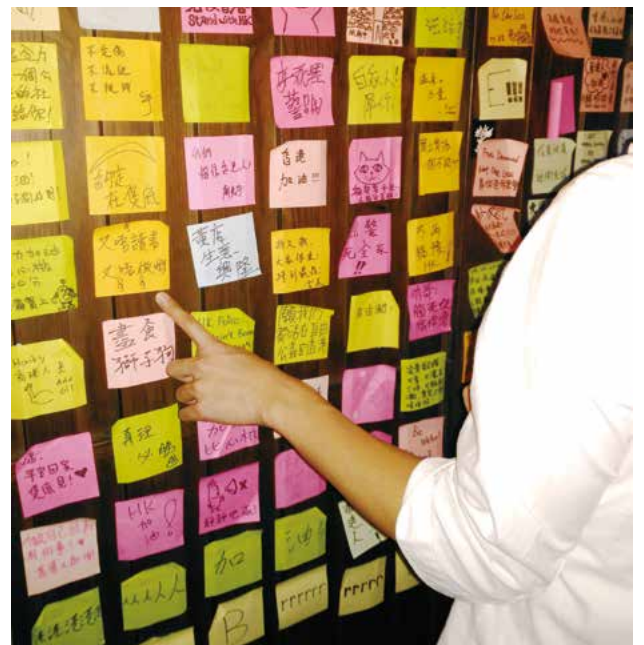


写真2 飲食店に設けられたレノウォール(香港島)。指でさしている「野」が広東字である。

*写真はすべて筆者撮影。



写真3 市民会館の側壁に設けられたレノンウォール(香港島西灣河)。印字された文の中に広東字「嘸」や「嘅」が見える。



写真4 陸橋のエレベーターに記された政治的メッセージ(九龍旺角)。

それでも、今の香港では代表的な広東字は概して『香港増補字符集』と同じ字体で手書きされる傾向が強い。書き記すという人間活動において、粵語に特徴的な語の表記は香港字の字体に収斂しつつある。これは大多数の市民がコンピューター・ネットワークを利用していることと関係している。パソコンを介しての印字では尚更のことである(写真3)。

この様に述べると、インターネット時代の画一化された文字使用という烙印を押されてしまうかもしれない。文字コードに登録されている字こそが現代の「文字」なのであり、登録されていない字は文字として存在しないのだという極論すら聞こえそう。しかし、私たちは手書きの政治的メッセージを通して、香港人の文字使用が決してその様に単純な構図に収まるものではないことを知ることになる。広東字が香港字へ収斂するなど、テクノロジーによって字体の標準化が高度に実現しているこの時代に、香港字を超えた新しい字体が蠢いているのである。スプレーを用いているとは言え、それらを生み出しているのは手書きに類する身体行為であり、書き手の大多数は何と幼少期に既にパソコン、さらにはスマホが普及していた若年層である。

香港字の先へ

香港字を超えた字体の筆頭に挙げるべきは「驚」である(写真4の右側)。これは「黒警」という2音節語を1文字で表した字体である。まだユニコードにも登録されていないが、私の知る限りこの字体は2016年に香港で刊行されたある書物に登場したのを先駆けとする。「黒警」という語自体は2014年に雨傘運動が展開された過程で登

場した新語と言われており、2019年の動乱では香港の法令や警察の内規を超えて市民を弾圧する警察を罵る語として頻繁に使用された。2音節語を1文字で表すのは、粵語史上これが最初であろう。しかも、文字構造では「黒」が下、「敬(警の声符)」が上に位置している。人間の言語の表出は時間軸に沿った線條の連続体をなすが、この線條性に着目すると「驚」は「黒警」との間に不一致を起こしている。文字新造のメカニズムに照らしても貴重な新例と言ってよい。

次に挙げるのは「甲由PoPo」ならぬ「甲由P@P@」である(写真4の左側)。「甲由」はゴキブリを意味する粵語の固有語、「PoPo」はpoliceの第一音節を重複させて作られた新語であり、「甲由PoPo」でデモ隊に扮して活動する私服警官を意味する。これだけならば、香港でよく見かける粵語と英語を組み合わせた複合語に過ぎない。しかし、「PoPo」の「o」に縦横一画ずつを加えることで、「甲由」を模した字体「甲由」を編み出している点に注目したい。アルファベットから漢字(広東字)が造り出されているのである。同じ意匠を凝らした字体は他の場所でも確認できた。黒服を着用したデモ隊武勇派は香港警察から「甲由」と罵られた。この縦画と横画の添加には武勇派の、隊内に潜む警官に対する侮蔑、いや言葉による復讐が込められていると考えられる。尚、「甲由」は第二次世界大戦以前の文献では「由甲」と記されている。「甲由」と記すようになるのは遅くとも1970年代からであるが、そこにはゴキブリを表す語の第一音節[kɑ:t]と「甲」[kɑ:p]の聴覚印象が似ることによるアナロジーが働いている。

最後に挙げるのは、「尿」である(写真5)。これは香港で英語のfuckに当たる罵詈雑



写真5 鉄道駅を示す標識に記された漢字(九龍尖沙咀)。

言に用いられる漢字「屎」を变形させたものであり、「吊」が香港鉄道(MTR)のロゴの前景部分「*」に変えられている。2019年の動乱では香港鉄道は警察の行動に歩調を合わせた輸送態勢や対応を取ったとして、デモ隊武勇派の攻撃対象となり、90%以上の駅で破壊行為が行われた。漢字とロゴのコラボレーションと称すべき「屎」に、単なる文字遊びとは性質を異にする、攻撃的な意思を感じるのには私だけではあるまい。

以上の3例は多分に政治的な意図に基づく文字構造をなしている。2019年に香港人が取った行動は、政治的無関心という香港社会についての旧来の固定観念を覆すに十分なものであった。そこに出現した文字もこれまた然りであり、「漢字は生きた文字である」といった修辞すら生易しく感じられる。固定観念を覆した字体に、私たちは既にその先へと向かう香港の香港たる所以を見るのである。

